

史料紹介

古宇田 亮 修

当研究所では、平成一七年度（二〇〇五）より社会福祉法人錦華学院に所蔵される東京感化院時代の史料の翻刻公開を開始した。本号はその一一冊目に当たる。過去一〇冊においては、第七号を除き明治期の日誌史料を中心として翻刻を掲載してきた。本号もまた、明治四二年と翌四三年の東京感化院の日誌類二冊の翻刻を掲載するものである。

当研究所がこのように継続して史料集を刊行することができるのは、常日頃より翻刻作業を精力的に進めていただいている北都古文書研究会（会長齋藤博氏）の全面的な御協力によるものであり、心より御礼申し上げます。次第である。なお本号の編集・版下作成は、筆者の担当になるものである。

〈史料 60〉 日誌 家族（明治四十二年）

当史料は、一二行書きの野紙で全二六九丁から成る和綴じ本であり、最終丁まで記載がある。記載期間は、明治四二年元日から大晦日までの一年分である。史料の状態は、表紙写真からも分かるように、冒頭と末尾の数丁

にかなりの虫喰い跡が見られ、判読不能な箇所も多い。なお〈史料59〉『日誌』（明治四十二年元日～二月二九日）と記載期間が重なるため、相互に参照することが可能である。主な記載者は一名（未特定、但し〈史料58〉の記載者と同一人物か）であるが、八月五日から九月九日まででは、その筆跡から清水橋村による記載部分も含まれるものと推測される。

内容としては、表題からも分かるように家族寮に関する日誌であり、〈史料52〉『日誌 家族』（明治三十八年一月起 第弐号）、〈史料53〉『日誌 家族』（明治三十八年十月起 第弐号）、〈史料56〉『日誌 家族寮』（弐号 明治三十九年十一月起）、〈史料58〉『日誌 家族』（明治四十一年）と同系であると考えられる。また、〈史料58〉と同じく、一日当りの記載量は充実している。

〈史料61〉日誌（明治四十三年度）

当史料は、一二行書きの野紙で全八四丁から成る和綴じ本であり、空欄二丁を含んでいる。表紙には虫喰い跡が多く見られるが、本文には判読に影響するほどの虫喰いは存在しない。記載期間は、明治四三年元日から同年二月一二日までであるが、一月二四日から二月一日までは記載内容が存在しない。記載者は、その筆跡から、岡西閑亭、清水橋村を含む数名であると推測されるが、詳細は未確定である。

内容としては、庶務課の日誌と考えられ、〈史料59〉『日誌』（明治四十二年）の後継に当るものと考えられる。一日当りの記載量は〈史料60〉と比べて五分の一程度であり、かなり簡潔であるといえる。

（当研究所主任研究員）